

せん人は此の三千人の將軍をかたきにくるにあらずや。法華經の自我偈を持つ人を敵とせんは三世の諸仏を敵とするになるべし。

今の法華經の文字は皆生身の仏なり。我等は肉眼なれば文字と見る也。たとへば餓鬼は恒河を火と見る、人は水と見、天人は甘露と見る。水は一なれども果報にしたがて見るところ各別也。此法華經の文字は盲目の者は（之を見ず）。肉眼は黒色と見る。二乗は虚空と見、菩薩は種種の色と見、仏種純熟せる人は仏と見奉る。されば經文云、（若し能く持つことあるは、則ち仏身を持つなり）等云云。天台云、（稽首妙法蓮華經、一帙八軸四七品、六万九千三八四、一一一文是れ真仏なり、真仏の説法は衆生を利す）等と書れて候。（之を以て之を案ずるに）、法蓮法師は毎朝口より金色文字を出現す。此文の数は五百十字也。一一の文字變じて日輪となり、日輪變じて釈迦如来となり、大光明を放て大地をつきとをし、三惡道無間大城を照し、乃至東西南北、上方に向ては非想非非想へのぼり、いかなる処にも過去聖靈のおはすらん処まで尋行給て、彼聖靈に語給らん。我をば誰とか思食す。我は是汝が子息法蓮が毎朝（誦する所の）法華經の自我偈の文字なり。此文は汝が眼とならん、耳とならん、足とならん、手とならんとこそねんごろに語せ給らめ。其時過去聖靈は我子息法蓮は子にはあらず善知識なりとて、娑婆世界に向ておがませ給らん。是こそ其の孝養にては候なれ。

抑も法華經を持つと申は經は一なれども持事は時に随て色色なるべし。或は身肉をさひて師に供養して仏になる時もあり、又身を牀として師に供養し、又身を薪となし、又此經のために杖木をかほり、又精進

し、又持戒し、上の如くすれども仏にならぬ時もあり、(時に依りて)不定なるべし。されば天台大師は「時に適うのみ」と書れ、章安大師は「取捨宜しきを得て、一向にすべからず」等云云。問云、何なる時か身肉を供養し、何なる時か持戒なるべき。答云、智者と申は(此の如き)時を知りて法華經を弘通するが第一の秘事なり。たとへば渴者は水こそ用事なれ。弓箭兵杖はよしなし。裸なる者は衣を求む。水は用なし。一をもて万を察すべし。大鬼神ありて法華經を弘通せば身を布施すべし。余の衣食は詮なし。惡王あて法華經を失ば身命をほろぼすとも随べからず。持戒精進の大僧等法華經を弘通するやうにて而も失ならば是を知りて責べし。法華經云、(我身命を愛せず、但無上道を惜しむ)云云。涅槃經云、(寧ろ身命を喪うとも終に王の所説の言教を匿さざれ)等云云。章安大師云、(寧ろ身命を喪うとも教を匿さざれとは、身は軽く法は重し、身を死して法を弘む)等云云。

然に今日蓮は外見の如ば日本第一の僻人也。我朝六十六箇国、二の島の百千万億の四衆上下万人に怨まる。仏法日本国に渡りて七百余年、いまだ是程に法華經の故に諸人に惡まれたる者なし。月氏・漢土にもありともきこえず、又あるべしともおぼへず。されば一閻浮提第一の僻人ぞかし。かゝるものなれば、上には一朝の威を恐れ、下には万民の嘲を顧て、親類もとぶらはず、外人は申に及ばず。出世の恩のみならず世間の恩を蒙りしも、諸人の眼を恐て口をふさがんためにや心に思はねどもそしるよしをなす。数度事にあひ、兩度御勘氣を蒙りしかば、我が身の失に當るのみならず、行通人人の中にも或は御勘氣、或は所領をめされ、或は御内を出され、或は父母兄弟に捨らる。されば付し人も捨はてぬ。今又付人も